

## 関連学会印象記

# 第17回ヨーロッパ心臓病学会

内藤 滋 人

第17回ヨーロッパ心臓病学会 (XVII th Congress of European Society of Cardiology) は、平成7年8月20日から24日までの5日間、オランダのアムステルダム郊外の、ライ国際会議センターにおいて開催された。アムステルダムは、運河が流れる美しい街並みが非常に印象的であった。郊外には、広大な牧草地がひろがり、牧草地にはのどかに草を食む馬たちや風のままに回る風車が観られるなど、大変牧歌的な雰囲気を味わえた。昨夏は日本では記録的な猛暑であったが、アムステルダムもまた平年に比し、気温は高かったが、湿度は低くしのぎやすく感じられた。ライ国際会議センターには、口述演題やポスターによる発表を行った27会場のほか、製薬会社や医療機器メーカーの展示が広いスペースで行われていた。今回の特徴は、ポスター会場が会場の中央に広く設けられていたことであった。

この学術集会には、ヨーロッパ諸国を始めとする世界各国から循環器領域の専門家が多数参加し、応募演題6193題のうちから、採択された2101題(採択率33.9%，口述演題844題，ポスター1257題)について、活発な討論が行われた。演題の応募は、ドイツ、イタリア、イギリス、フランス、地元オランダの順に多く、ヨーロッパ諸国を除いては、アメリカ、日本の順であった。発表内容としては、例年のごとく臨床不整脈に関する演題が最も多く、以下冠循環(虚血性心疾患)、心エコー図、心不全、Interventional cardiologyの順であり、この5分野で全体の38%を占めていた。本学術集会は、molecular biologyを中心としたbasic reserchが主体のアメリカ心臓病学会に比し、clinical reserchが主体であるため、どのsectionも臨床家にとっては興味深いものであった。メイン会場であるAuditoriumでは、最近特に注目されている領域のsessionが行われたが、筆者が参加したいくつかのsessionについて、以下に述べたいと思う。

### (1)臨床不整脈(カテーテル・アブレーション)

臨床不整脈に関しては、相変わらず最近のトピックスであるカテーテル・アブレーションに関連した演題が多かった。WPW症候群に関してはすでにそのピークを過ぎた感があり、やや低調であったが、単極電位の特徴やantero-septal accessory pathwayに関する演題が多くみられた。房室結節回帰頻拍(AVNRT)に関しては、カテーテル・アブレーションの進歩によりさらにミステリーゾーンとして注目されている房室結節のanatomyに関する演題が多く認められ、slow pathwayとfast pathwayの存在部位に関して活発discussionが行われた。そのほかAVNRTに関しては、カテーテル・アブレーション後の自律神経変動に関する演題も多く、アブレーション部位における差は少ないという結論が多かった。WPW症候群、AVNRTのほかには、心房粗動、異所性心房頻拍に関して、多数例によるまとまった報告が発表された。心室頻拍に関しては、特発性心室頻拍に対するカテーテル・アブレーションの報告が多かったが、心筋梗塞後の心室頻拍における演題も発表された。その成功率はまだ満足できるものではなく、今後saline irrigation ablation catheter systemなどの開発が期待される。また、最も新しいトピックスである心房細動に対するカテーテル・アブレーションにおいては、動物実験のデータに留まっていた。次回の学術集会では臨床例における成績が発表されると思われるのでその成績が興味深く待たれるところである。

### (2) Interventional cardiology

急性冠症候群に対するinterventionに関する演題が多くみられた。不安定狭心症に対する対処法、特に血栓溶解療法とPTCA、new deviceの選択に関して熱心な議論が行われた。そのほか冠動脈病変の形状や病変枝数によってPTCAと冠動脈バイパス術のどちらを選択するか、急性心筋梗塞に対するPTCAなどに関しても多くの演題がみられた。New deviceに関しては、昨年と同様にDCA、

ステントに関する発表が多くなされた。DCA に関しては、ステントの出現後やや適応が絞られた感があり、本集会においても、large vessel であること、eccentric lesion であること、ostial lesion であることなどが適応として再認識された。やや興味ある演題として、高度石灰化病変に対して、cutting balloon による PTCA 後に DCA を施行し良好な成績をおさめた報告があった。ステントに関しては、palmaZ-Schatz stent を始めとして、各種ステントの成績が報告された。急性心筋梗塞や急性冠症候群に対してステントを用い、良好であったという報告が多くみられたほか、慢性冠閉塞 (CTO) に対してもステントが有用であるとの報告もあった。そのほか、ステントに関して、その長期予後、再狭窄率 (ほぼ12%-20%)、QOL の改善などに関する報告やステント後の抗凝固療法の必要性などに関する報告もあり、大変興味深かった。再狭窄予防の予防としての薬物としては、ACE 阻害薬、diltiazem、paclitaxel などが報告され、再狭窄予測因子としての LP(a) の有用性も報告された。

### (3) 心不全の治療

ジギタリス、血管拡張薬など従来から使用されている薬物のほかに、ACE 阻害薬、Angiotensin II receptor antagonist、新しい inodilator、PDE 阻害薬、l-carnitine など種々の薬物に関して、血

行動態、neuro-humoral factor などに対する作用を含めた報告が多数みられた。特に心不全治療に関しては、心不全症状の改善とともに、長期予後の改善が求められるため、さらに今後の検討が期待される場所である。

以上、第17回ヨーロッパ心臓病学会の印象を書き留めてみたが、カテーテル・アブレーションにおける心房細動への応用、虚血性心疾患における new device の発展、心不全領域における薬物療法の進歩など各種循環器領域における急速な発展が認められ、かつそれらについて多くの観点から検討が加えられていることが、本学術集会に参加して大変強く感じられた。今後これらの領域において日本からの発表が世界の注目をあびることを強く期待したい。

また、私事であるが、学術集会終了後にライデン大学を訪れた。ライデン大学は、臨床医学の祖である Herman Boerhaave が初めて臨床医学の講座を開き、多数の臨床家を育てた地である。現在の大学は新築されたものであるが、元の場所には Boerhaave museum があり、当時の解剖学教室などが残されている。

学術集会において新しきを学び、ライデン大学において古き歴史に触れることができ、大変有意義な夏を過ごせた。